



官家富商之婦女行路之圖

奴女

簪花



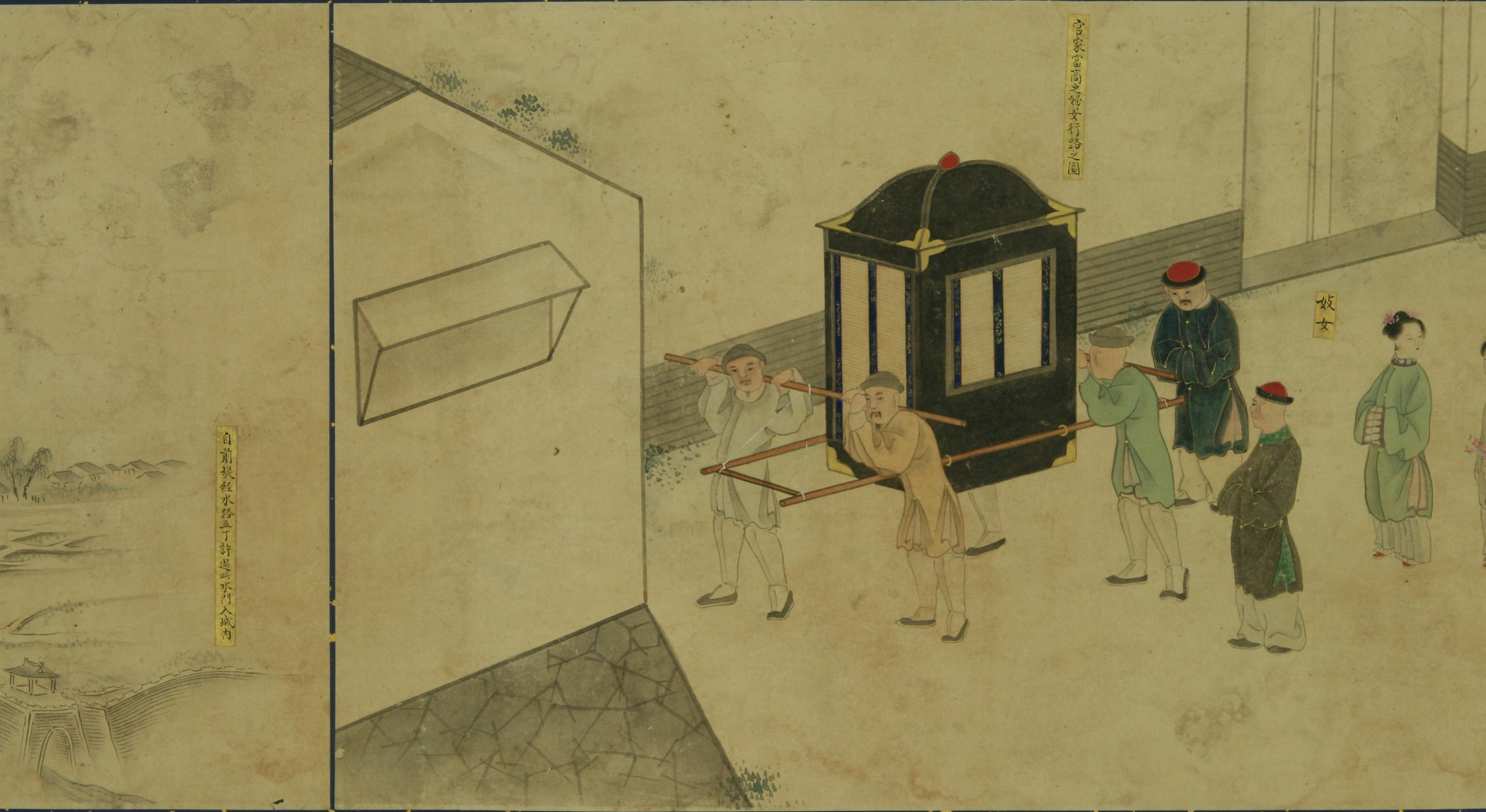
Red seal impression in the bottom right corner.



官家富商之婦女行路之圖

妓女

自前堤經水路五丁許過此水門入城內



遠見此塔

杭州市中

乍浦

出此川

自前堤徑水路五丁許過此水門入城內





昔助役人と立出たりふ路あり 水主共と皆行列ありき本通次ゆく事三  
 丁路跡を西の臺より入る言主いして 役人へ挨拶し 杖を招入るを扱  
 店御はいささ三尺許の桐櫃之尺柄あり 漆を塗り組子小櫛の花瓶状形  
 刻し 桐油と塗りしものにしてこれと漆を塗り店より六七人ありて 漆多の本綿  
 刺し織を買ふありし 又其内へ押迫りの板ありて物買りと人ありし 其  
 とくとも出して一切内へ人を入ると店の壁間へ桐あり 簾竿ありし 又算盤ハ  
 堅五寸横を尺許三寸粒ハ五寸四りしあり 杉の俵内敷を出して 飲食あり  
 ちし 漆塗り人集りて群を成し 一席 言主進退あり 居て 禮謝して  
 歸りぬ ○十一月朔日 陰天 朔五河合に粥飯食し 予自貞次序に昔助といひて 大なる  
 古物櫛より係役人言主と業内へ内へ入して 大なる堆棊の花入二ありし 言主  
 二尺許上大さく下細くありて 木柄細密なる 坪木の言主物なり 價銀二百圓と  
 札ありし 又指子界の行書爪高き言主寸許部柄ありて 白鏡五十二行書あり 掲物  
 あり 價五拾五文 五拾貫文 又言主六尺横四尺餘の地也 鳳皇状画あり 掲  
 縁色の縁より古画ありて 各名氏あり 價三百五拾圓あり 又大掲物五幅ありて  
 言主二尺許の文字ありて 書其昌と落款あり 價一貫五百圓あり 其外の珍  
 物より 漆塗り 言主 指子ありし 言主 桐ハ八重のかんきと作りし 小毛纏状  
 布あり 每品あり 價を書いて 張りぬる言主より 三丁許迄て 錫細工ありし 言主  
 あり 年二十許乃男袖状に言主して 一軒の富家あり 有りし 言主 爲許の音焼  
 あり 一間小なる古画状路多あり 出して 尺七寸の室ありし 言主 膳兵ふ局  
 の言主 静退ありし 三幅状清ありし 杉の茶と菓子状出して 登壇ありし 言主  
 あり 言主より 向くし 言主 我々三幅状清ありし 言主も 返謝あり 膳物ありし 言主  
 あり 役人ありて 衣裳一色状膳と 言主の言や 少く小拾一とあり ありし 言主  
 膳の言主 ちりありし 言主 漆塗り 杉の柄ありし 言主 竹籠小氷砂糖を入  
 寺内 進物を膳とぬる言主より 市中一里路も 尺物ありし 言主 言主 賣ト 又童子十  
 人許して 戯言を言主と 其外の言主 者總ありし 言主 又樹の本通二丁目  
 大なる石門状立木の四角分して 店を開き 瑞璃俵状掛ぬ 又膳を言主の言主  
 飯と出らせ 膳の馳走小籠ありて 在る言主 宿の膳ありぬ

浙江城内青樓

青樓



浙江城内青楼



青楼

妓女九千人詩

坂と出はせ妓女の馳走小舟に上りて夜半の宿の場を廻る

浙江堤



十一月二日 陰天  
 任人小僧寺内の裏通りへ五六丁張るまで一人家静ま  
 の河邊より左大橋路多生堂あり又より小大なる橋船六七艘あり又任人  
 手紙して彼乃船より人といふ堂ありといふく片橋舟紙書して来せり  
 橋よりいふ堂よりて三人ありて多のこれ橋を船中三所へ奇祭の座りて  
 いろりの物を飾り額をくしと掛りり 杉の燈耐也油あるの者紙持来りて是れ  
 妓女任人へ何れは物や三の小頭代りの女共ははるる屋へくし我れ持てた  
 暖へくし是れり 月琴胡鞠雀之絃と掛りてくしくしと具をくし事又書何れ  
 在入河分り寺ありの如

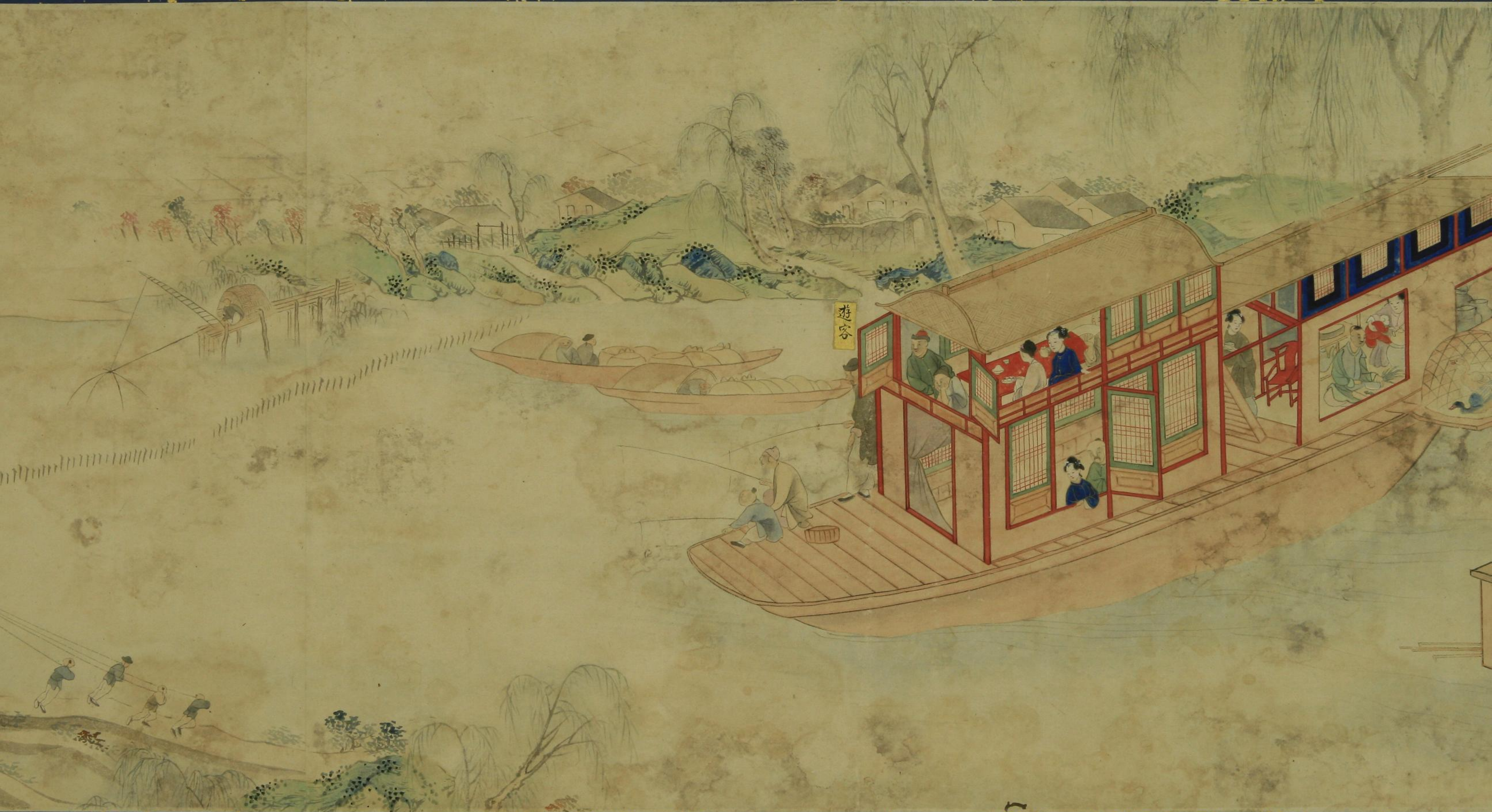


浙江堤



妓女





遊客



往來之旅人



宰領官役

髮師

筆製

油積船

紙積船



往来之旅人

扇子製

○十月三日 晴天 役人書曰今日送到嘉興縣此日近浙江入浦在事七日也

役人数十人進く寺のまゝ轎二十六乘をいこまを多敷しての道と小群退すといふも不承なる路くのりて大道より西へ向ふゆゑか大なる石門ぬも門を通つて歩付休息を定めて又謹言とて一剣を帯馬おれりもたふも軍術訓練の精古としふも賑々敷事也早も轅門と寫る所額あり川渚あり是等何の樂て橋船三艘捕ありて皆先小系船と此所先度好樂川筋なり是より六丁許迄は石坂あり坂上の川と大河と地回きい不審事也と評然なり 依も役人へ手紙をりて尋ふも不通何令と及五人付添へ船成出へぬ ○十月四日 晴天 船仕廻り滞滞して嘉興縣小川のほとりを在り何分り

石門縣不恙ぬ浙江より行程八十里也といぬ役人書曰東向小河行走到乍浦止ける煙草紙紙ありて其不取石門縣の紫乍浦小い道大なりとらうかと遠方の浙江へ送こし杭州の支配領なるといふなり七何分船と出へぬ ○十月五日 晴天 未明より嘉興縣より石門縣と在り事方里四里 教拾六 里治 言も又大河四百里遠く大船數十艘往來するに付令陸路して茶坊より役人此の倉庫に打せり察して其へし早も城内及び物々水晶と書る額ありあり物々多く硝子器と書ふありあり小て眼鏡と書三拾二錢を買ふ事と又書録に到るも墨斗丁に書一冊紙路あり

茶坊より故人の舎事取扱ひ申上りて其下より早急城口迄は物も  
水晶と書ある額ありて多し物も多く硝子器と書ありて多し  
價三拾二錢に買はるる又書肆に到りて墨汁に書一冊取扱ひ

素本 書棚に倚て見んとすは是物人多く集りて少成りて申上りて  
去て肉店に到りて故人より麵 麵は取内の 二概行を與ふ又友人列列成續

訶囉を唱へて僅末其教成るる路障して船の勢も多しありて  
多し故人の道より少なりて船成七何分少出たりて西風強く船

付分りて平湖縣より志きぬ ○十月六日 晴天 早朝舟列立て茶坊より  
鹽水湯入いりて一人我邦の言活々粗通は者多し手紙を

此邦の人臺灣國へ渡る者十三人南より福建より送來して左浦に  
滞在のよりありて又志興縣より平湖縣迄舟事三十里平湖より

右浦に舟事三十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

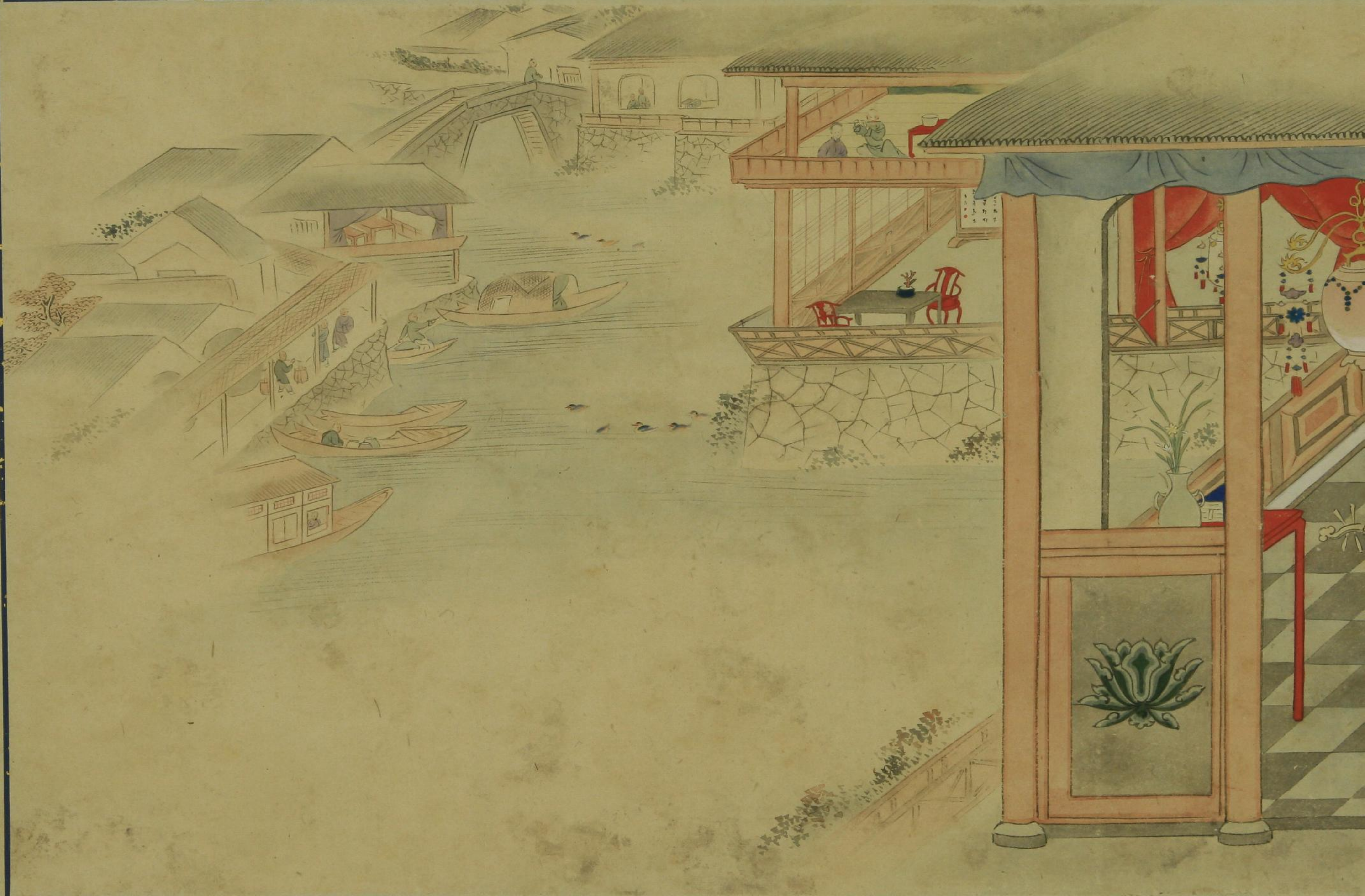
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里  
舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里舟事二十里

乃成其小極活堂の髪師是の爪取或ハ胡朝の三のあん海老の妻をセる者  
 あり擔下母は替者多くもき店々物と云ふハ徳春の人錢又ハ昔ふと名  
 ありぬ ○十一月十一日 陰天 佛詣足事成清不通子支取又別日歸してハ極  
 一回母は成かぬ 今日ハ世人教りて臨ハ明日はきく屬してあり故  
 十三人して寺母はしめ北の方へありあり乃嶽をけりて走のり人  
 追々ありて官人より呼聲のふくく入てて絶頂の別を  
 何眺望するハ一向山嶽ここのは見えハ徳母の高船其教を云々地方  
 徘徊して衣入何分ハ歸りぬ ○十一月十二日 陰天 宿て西の橋とて毎日  
 大勢群集して極不存極ふと役人ハいひ分るハ唐人日をも動かしとてハ  
 日本人より其ハ俗等も珍奇なるハと云ふ ○十一月十三日 雨天 本朝船  
 の船主徐有母といぬ者本朝我ハ浙江の山嶽にきて徐等を  
 諸々乗船するハもろ言ふハと下侍して饅頭成勝る ○十一月十四日 晴天  
 日中ハ教度本朝セハ者三人本朝極の味ハ今年泉州漳州乃道ハ  
 阿蘭陀船儿三拾艘歸りありと云ふハ古人是成知るハ不知極ふハ日本ハ  
 東將軍交易と云ふハ又長崎將軍も皆役人成りて高成ふハ不好  
 不好と云ふ極方して候ハ ○十一月十五日 晴天 煙草とハ紙と成銘ハ勝りぬ  
 ○十一月十六日 晴天 大坂の者共招みありて遊玩してあり形も役人追々  
 あり候耐ふハおありて終日ありいて歸りぬ





○五月十七日 陰天 有人于堂の使者来りて彼の宅へまじりて云くこのよりある

通事しるしとてあはれとせり故に昔助曾坊の娘は改めゆくと

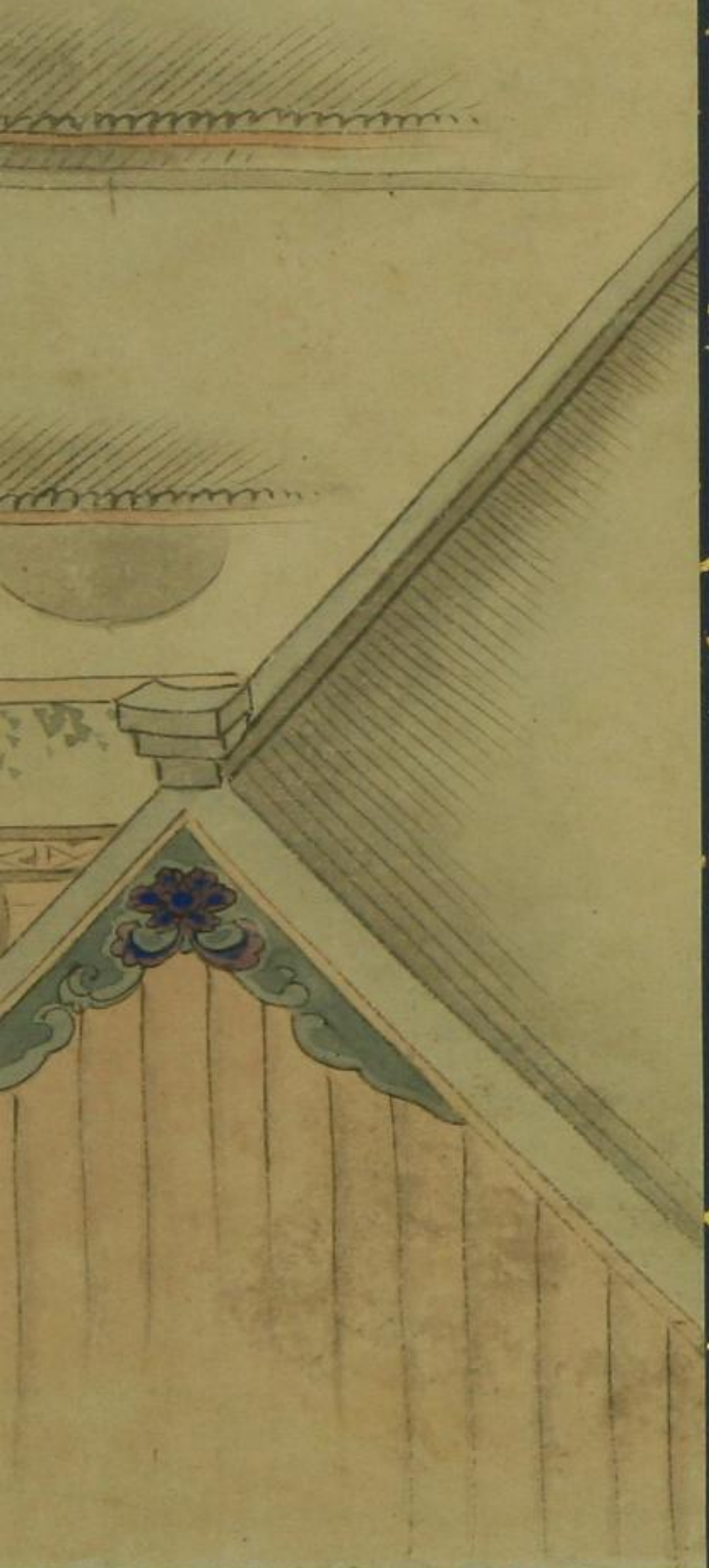
大なる門城過ぎ奥の座より通る事重し 齡六十餘の白髪乃人より衰成

恙て椅子より倚りてあるなり 床は甘地と朱子家訓と金字の書ありてかけ

のし掛又四人して多くの書画と抱きり机案よく共して観せしむ形の一問

口より婦人三人窺見す柳をわきの後ハ側をくまふと衣裳をくまふとて

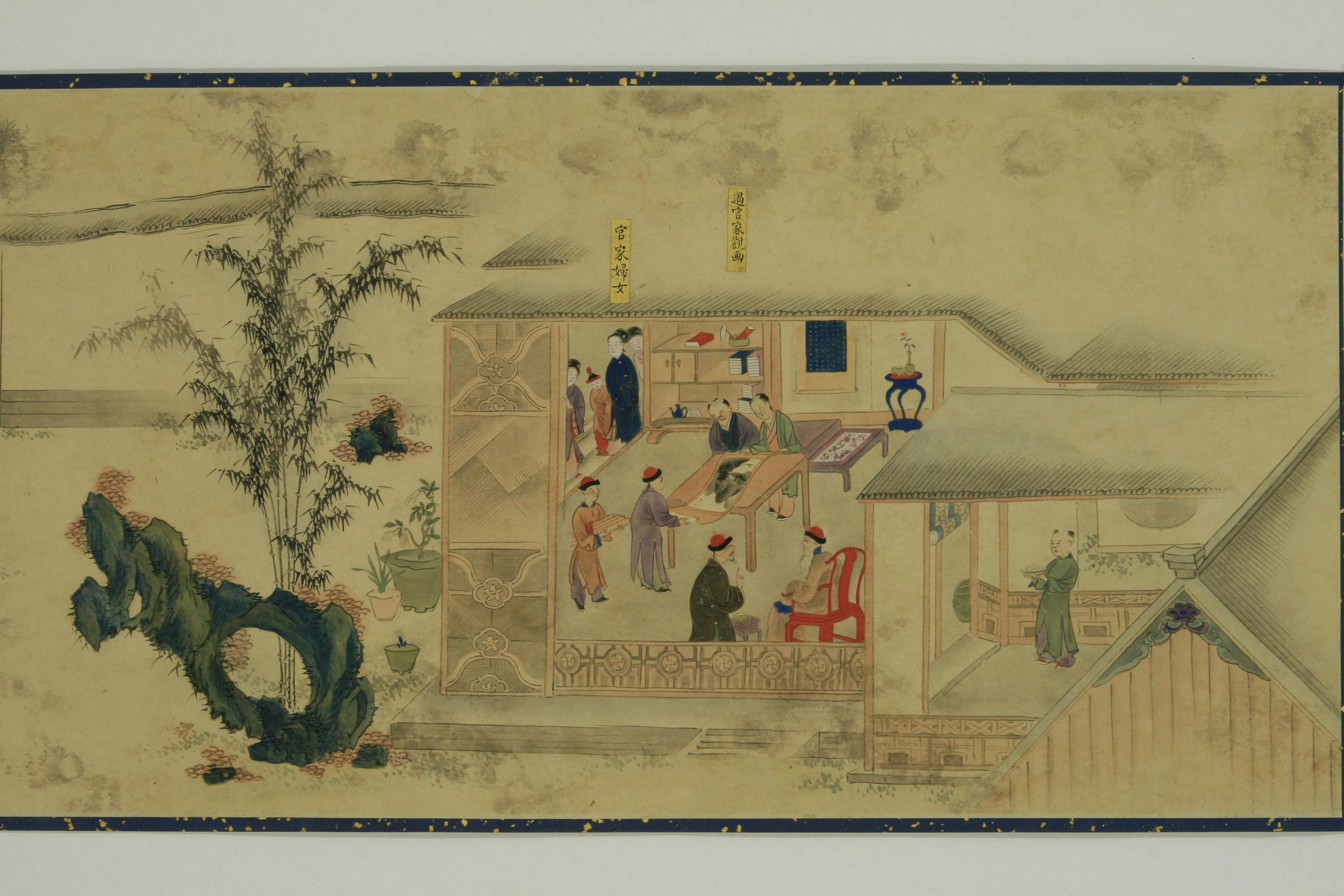
着て椅子へ倚りてあそびたり。床は紺地に朱子家訓を金字で寫し置りてあけ  
 のと掛又四人して多くの書画を捲き、机案上へおきて観せしむ。形も一間  
 口より婦人三人窺見し、袖をうしろの後に側をくまひし衣袋をとり、白文をうけ  
 香囊、教都とて、美しきもの言ふべく速かるし。もてよる茶をとり、雪片  
 糕と煉乳の大餅ありし。して出ぬ。又彼の婦人我邦のさせると煙草、湯の  
 箱く入る形くおせ、なして是を吹くむ。衣裳は黄いろ、綸子形、顔も天織紙の  
 縹を入るも、なして、髪は生花、花簪とす。衣入は縹とんと、身はくろいふ  
 せし。まゝ主小掛物二幅、茶菓子類、大餅く入ておせ。勝つぬ。○十一月十八日 陰天  
 官人あり ○蒲團大小二枚 島織木綿 ○手拭一枚 島織 ○大風呂敷一枚 股通織  
 鞋上下二足 綿入一枚 鳥色の綿 ○綿入羽織一枚 黒色の菱 ○袴羽織一枚  
花色のいりちい ○竹行李一 鉄鍵 ○刻煙草二包 ○紙二束 二束 ○右十一日と毎  
表渡者綸子也 人々、其の厚禮して謝す。○十一月十九日 晴天 吾朝船の水主大徳、  
 追々長崎へ送列する。○十一月廿日 陰天 早  
 朝より通事乃業、内して、贈物、礼進とて、城内の女、五六人、いふ、  
 あり、あふ、友人自、い、て、菓子と、贈、茶、具、ぬ。○十一月廿一日 陰天 近所  
 の、勝會へ、列、見、候、と、して、十六人、錢、五、十、文、行、を、携、へ、り、海、賊、賊、と、真、を  
 る、て、衣、入、何、分、り、留、り、ぬ。○十一月廿二日 陰天 横り、口、論、り、て、か、い、  
 せ、き、故、り、り、て、刃、を、り、水、主、と、和、泉、の、吾、左、衛、門、通、事、と、手、論、り、て、  
 多く指、爪、お、く、と、急、を、察、見、候、序、も、ら、る、指、を、押、と、り、吾、左、衛、門、と、り、り、  
 三、川、り、て、橋、上、に、色、を、か、し、へ、り、空、中、序、向、い、い、ぬ、和、泉、吾、左、衛、門、の、元、馬、廬、也、  
 你、想、を、と、り、り、り、と、異、と、折、と、の、橋、上、に、り、て、語、を、こ、く、女、通、事、へ、味、噌、の、買、  
 入、方、派、の、り、り、女、の、血、を、買、て、来、ぬ、一、坊、の、唐、人、の、大、馬、廬、形、紫、と、栗、口、派、い、り、  
 へ、い、い、ぬ、何、の、松、耳、也、や、入、り、あ、ん、た、り、候、と、立、其、候、い、い、り、お、り、と、喜、ぶ、と、  
 想、て、二、り、り、り、り、り、と、又、こ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 通、事、も、と、り、  
 ○十一月廿三日 陰天 吾朝船の水主、い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
 残、り、  
 船の會、り、  
 行、燈、と、煙、草、と、盆、派、と、り、  
 役、人、り、  
 侍、り、  
 ち、り、ぬ、夫、り、り、海、宴、教、別、り、





過官家觀畫

官家婦女





○十一月廿五日 陰天

官及三人参り今日ハ四人教主人のあり申ひて織あうりと

いぬ返小月代ふと仕出あうらうらうら衣表と羽織狐裘一鞋狐裘きてハ何分

役人と共々二層大なる豪華に紗室門を入室に玄關主人出向ハ挨拶

ありて奉向二十畳茶室の席小亭子七を備へ櫻一掛狐かけを椅子

通事一銘々手紙よりして作りむ又座中は大掛物一幅 大木のりく童子の をかけ

香狐掛と壁之上面ハ梅竹数の小掛物数幅狐かけをも左太ハ燈籠六

月二ハ針張とまると 四ハ瑠璃燈あり を掛布奇素形ありまきかみ一まき料理の

湯瓶一けく名狐狐入と紐相臺の四方ハ中四十二狐高き紗室りの

袴三通あり長ハ六寸許廻七寸程の卯狐狐醬油して惠ああり天眼漬

落花生の輪掛肉湯漬の乾飯多あり大鉢ハ豚のり物あり乾飯の跡ハ地

けして惠ああり海氣ととん庵んと惠合ああり雁と芹と羊肉と

大根と鶏肉と燕巢と惠ああり鯉の丸惠アと砂糖の餡入する湯漬を

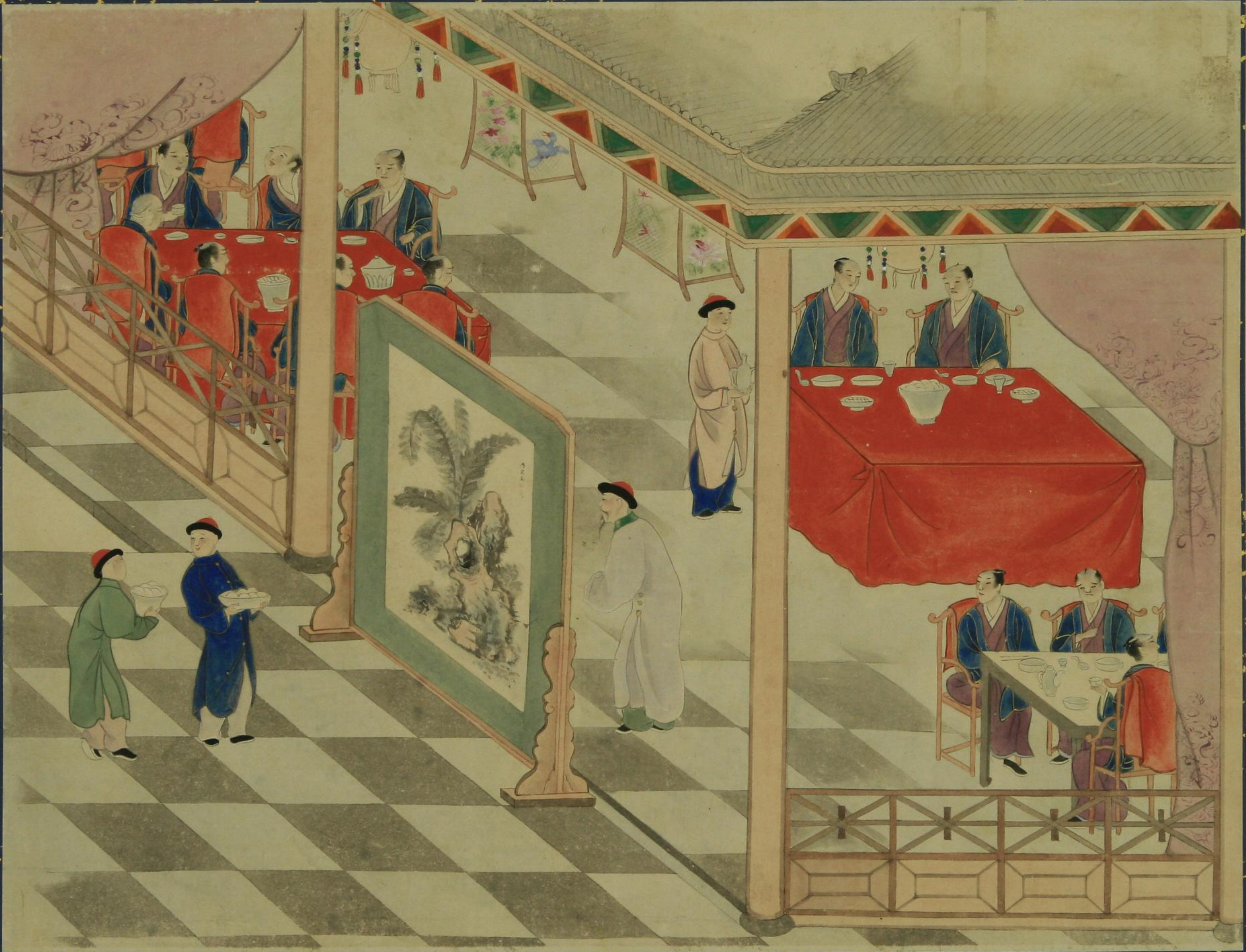
茗下地ありうら茶肉を入る湯漬ありありあり座端ハ大根菜芋と

惠ああり大井品あり事都合十二夜入る飯をとりぬ漸くまじりて

挨拶あり登座の次申入参事あり入る相禮して帰る也十一月

廿六日 陰天 主人二人奉参十三人今日系船ふとむとて人教を引はる

挨拶を済ませ、昼食の次は忠入寮へ参り、衣入を相替りして御用。十一月  
廿六日 陰天 主人二人奉寮十三人の今日乗船ふさしむとして人数を算し、左次郎  
兼んとし、いしむるに、你を路りの海屋へ参り、坂み林目の者四人、権子島の者五人  
指宿の者二人、垂水の者一人、合和泉の者一人、主人より詔く、名書せしむり、さき  
宵して渡り、ぬるさし、海涯迄我も送りしよし、主人三人、海をこし、船を  
舟に、出帆、はるる、いと、いと、紫



○十一月廿七日 陰天 任人奉寮十三人の乗船、今日出帆、はるる、いと、いと、紫  
海上安全の爲、寺内へむいて、戲言を真り、を残十三人の主人より、又物す、し、の  
り、あ、故、衣服を、改、任人と列立、寺の、ち、二、派、入、り、て、戲言、堂、小、さ、り、  
今、寺、辨、り、  
正、面、へ、ち、り、佛、三、佛、を、あ、置、り、左、方、へ、帳、二、尺、を、供、中、は、慌、慌、踏、多、く、踏、り、て

海上安全のありきありて我言を真りに残す三人の友人ありて我言を真りに  
今手紙の  
りりり故に衣服を改めん何人と列三寺の大門二派入りて我言堂ふりり

正面より佛の体とありて 左より 燈二足と供 中より 蠟燭三枝とありて

其向の舞臺と横の左右を横より 我言堂の正面より 佛の座よりとありて

聖始より何人路多群瓜那 一ぬるきより 銅鑼を鳴り 鐘撞の

如くありて 燈二足とありて 一人出でて又一人の拍子をとらして 舞ありて 一向に不通

として 燈二足のなりて 何人も何人もして 大に笑ひて 九付命の 妙理を授け

来紫官人の事通事をして 挨拶ありて 故に一回お祈り 燈は日人多き中より 女

人より何れいひて 何れいひて 我言堂より 婦人の一切の心ありて 何れいひて 又何れいひて

燈の馳走りして 恐入りて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

近道の焼物店の主名は元由とありて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

奥の二間より 列りて 先茶次郎のいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

又洋より 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

尋ねて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

やと問ふ妻ありて 一人の事とありて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

其より 元由の指物一幅とありて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて

何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて 何れいひて



五人使の事として茶用と云はしるの事人にも向くまゝして極端な石又何人一人は  
 梅とく付居て終日粥と濁る茶瓜菓一旁町寧静又過なり ○十二月三日 晴天  
 既く茶館の暇ありしと云ふ相知己の人々懐かしくして酒菓子或は色くれし備りの  
 烟草紙類と餅多持りて勝負具に終日人の絶間ありしと云



唐人四頭役人数十人曉乞として送る事ありたむ津立中の恩瓜謝し

厚礼として帰國の喜の命を懸きりて長崎にありし船中の油紙をりて

船よりある事ありりるは船中にてゆく事あり一里許りしては船の

到り船中の徐有舟あり彼は可寧なる事ありりり七何分り住居あり

船に船中の徐有舟あり五椀の金子にして考へて肉類は用ひぬ

机より侍りてありし事あり一人の書記紙に唐人を一人に記し

書冊とあり名氏國籍を記して書せしむ故に教書ありりりりりり

國籍を記し記しある事あり長崎將軍志ありりりりりりりりり

系らりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

風強く己午の方へ走れりりりりりりりりりりりりりりりりり

入して勢りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

は来りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

酒風 丑の方に走れりりりりりりりりりりりりりりりりり

以しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

るわらりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

霞を飛り波高りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

をりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

あけりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

洋中りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

又我邦の船に柱たし板高く底尖りりりりりりりりりりりりり

是我邦と製異なりりりりりりりりりりりりりりりりりり

丑の方より何れ船頭装束ありて船舟のより毛氈紙より香を焚き

字の書しりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

南より向ひ三指を衣入何れ又燈を入れて勢りりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり



仁浦出帆

僧来乞米

書して一切陸よりいふ所成り候へば度上り自是日寄之津  
同古三自長壽ノ入津マ察  
備立と  
舟出帆て





分手謝始終恩

乘船

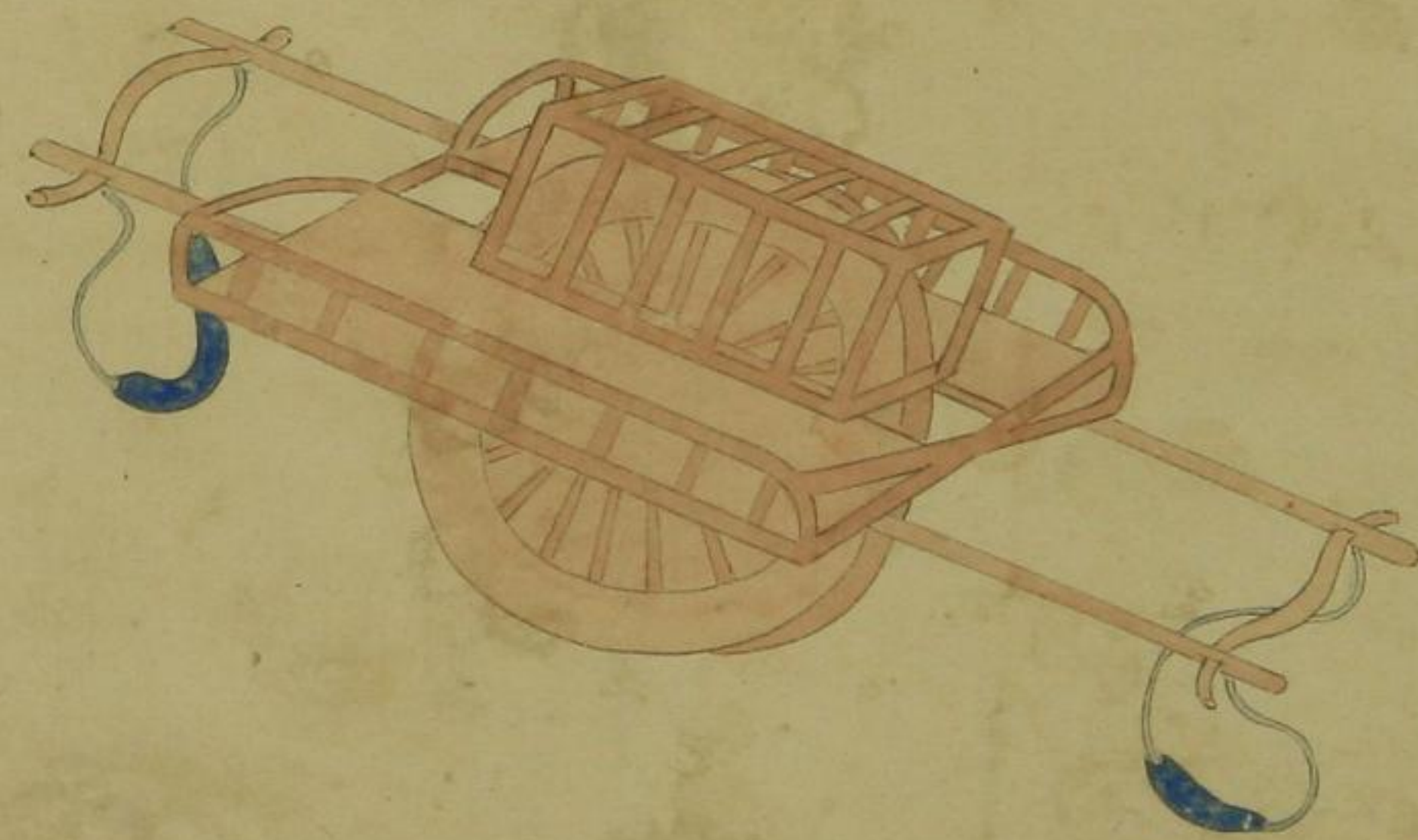


分手謝始終恩





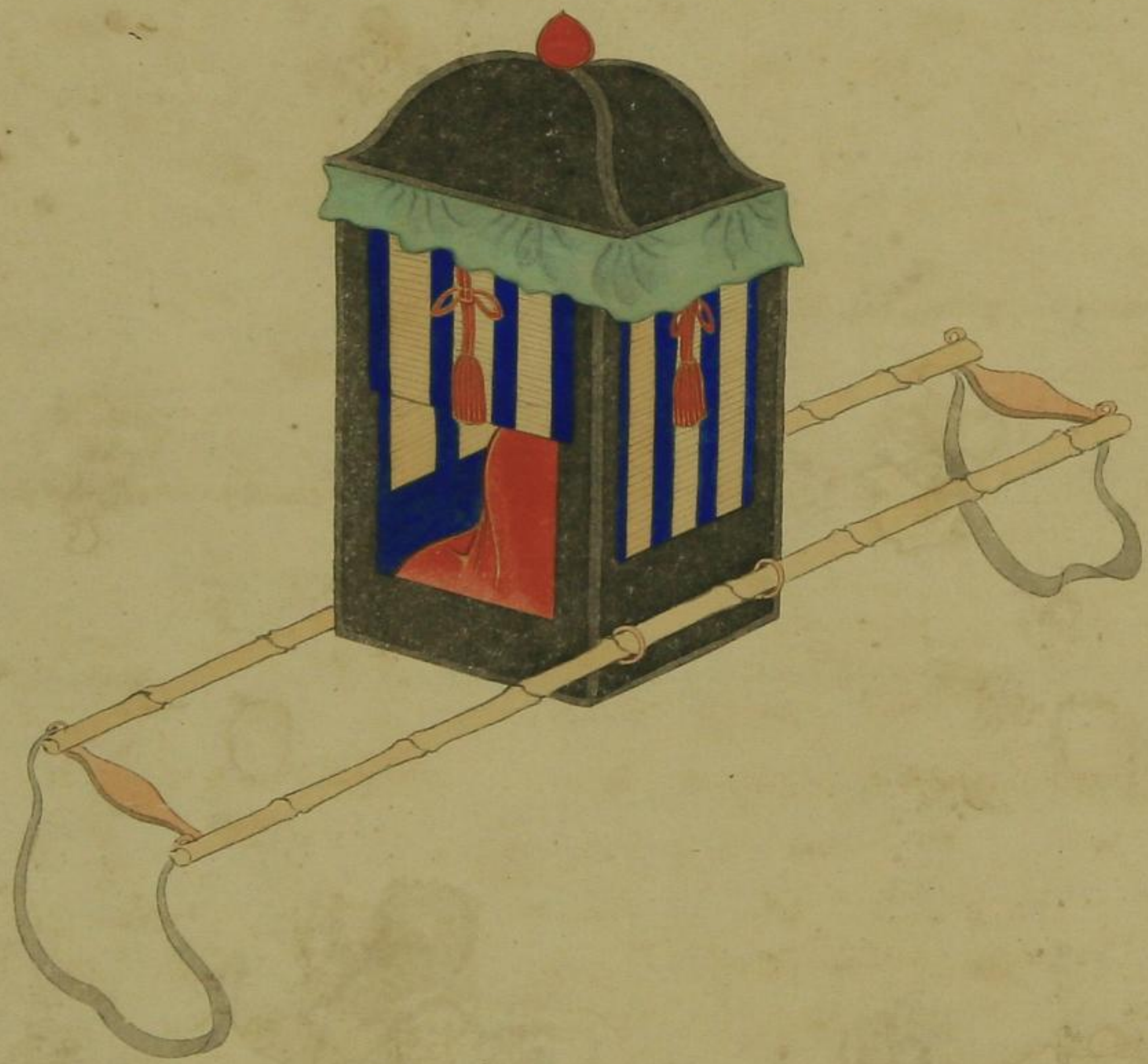
樓船



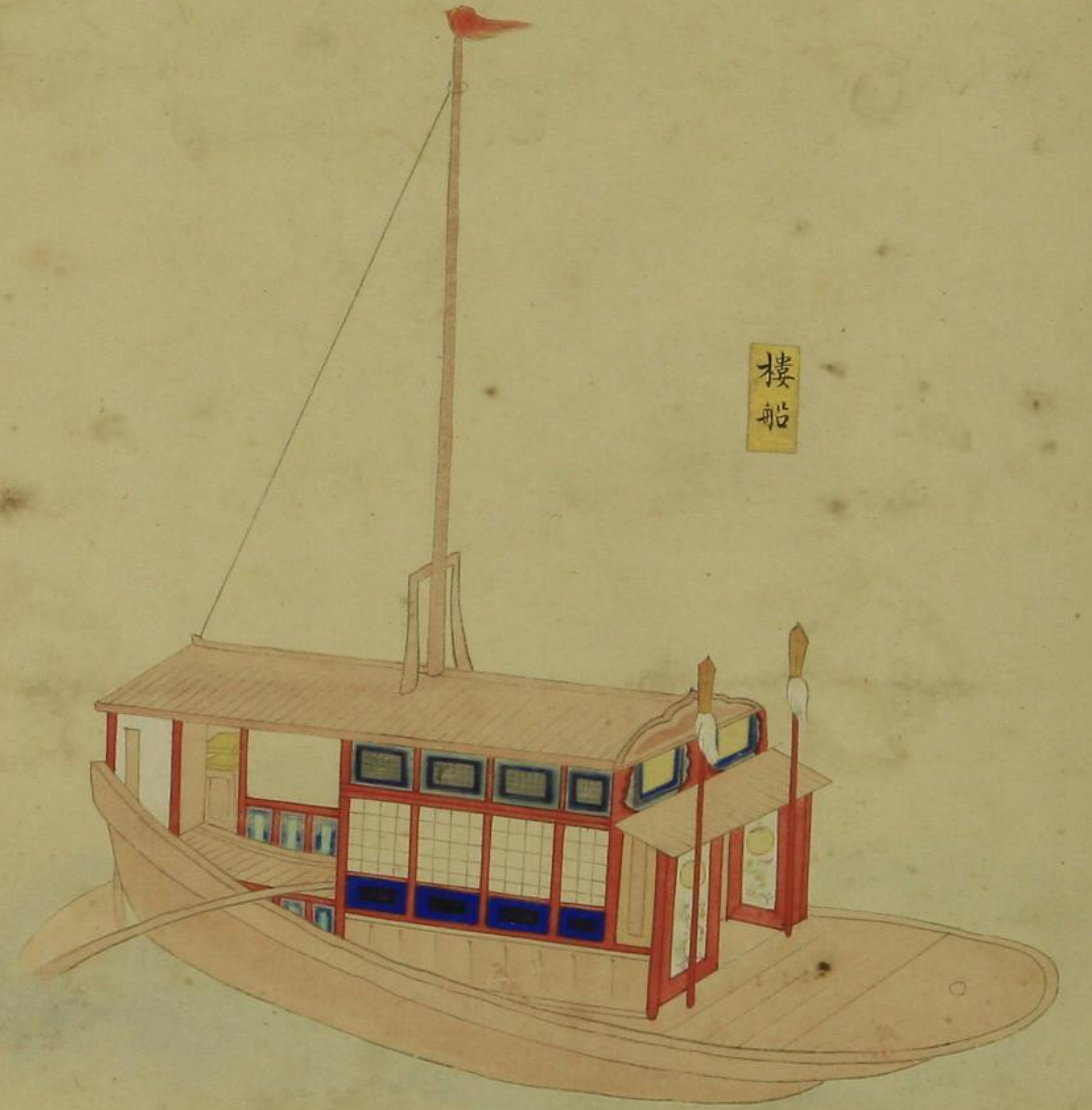
輦



轎



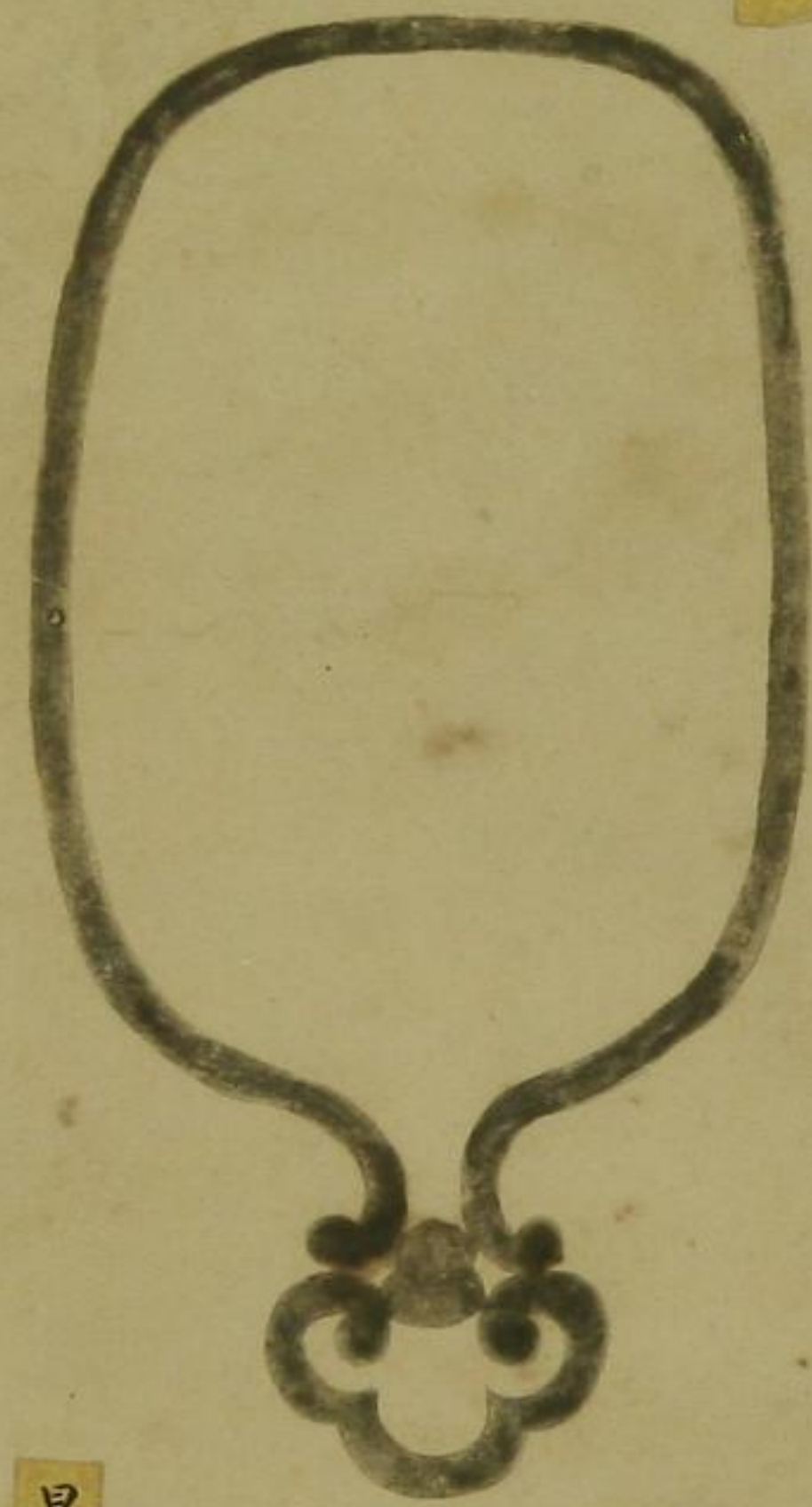
樓船



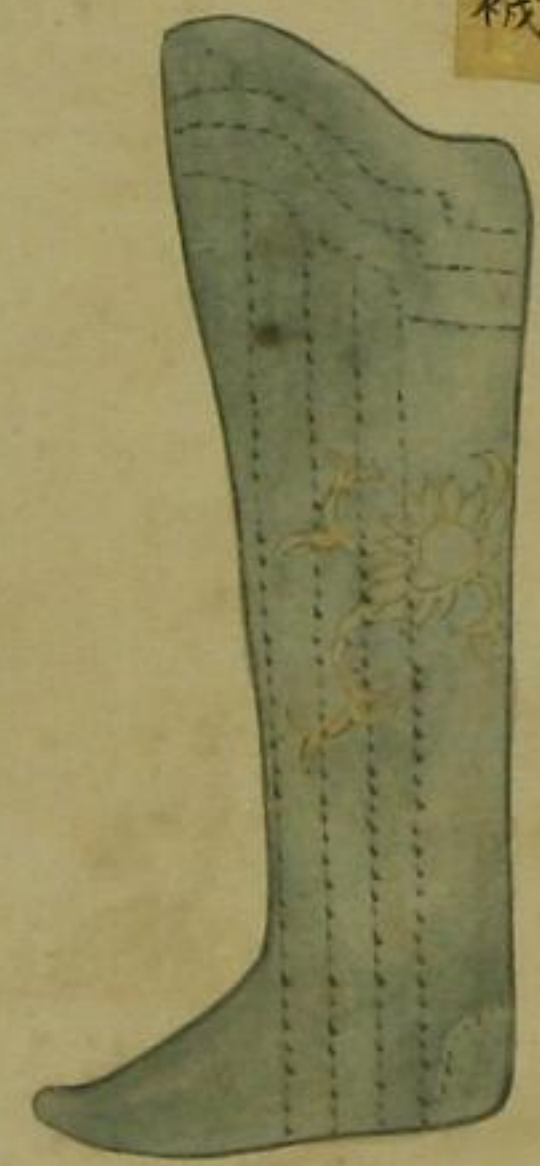
寶蓋



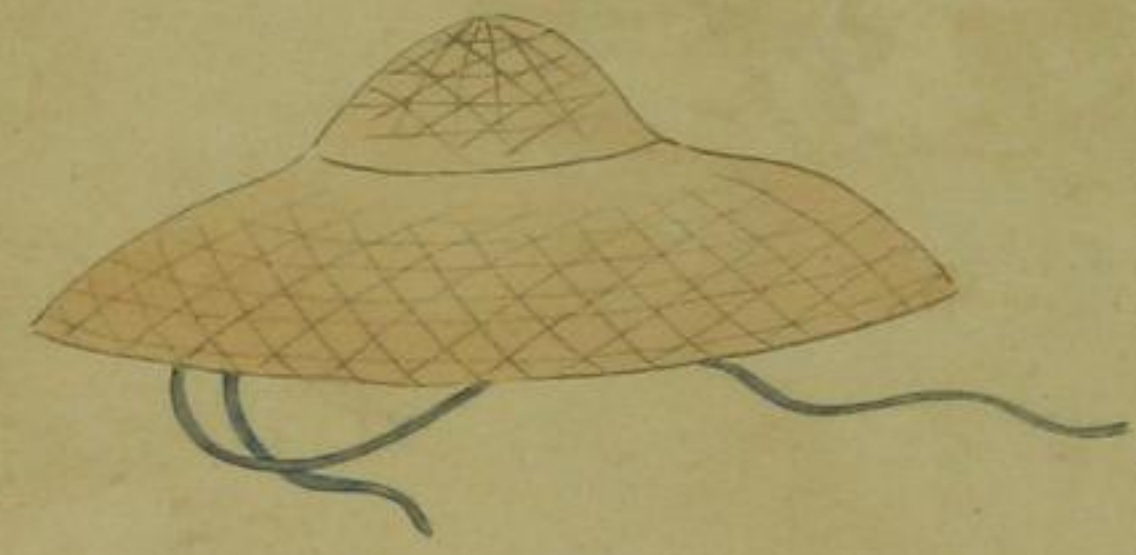
項圈



暑襪



蒲鞋



手環

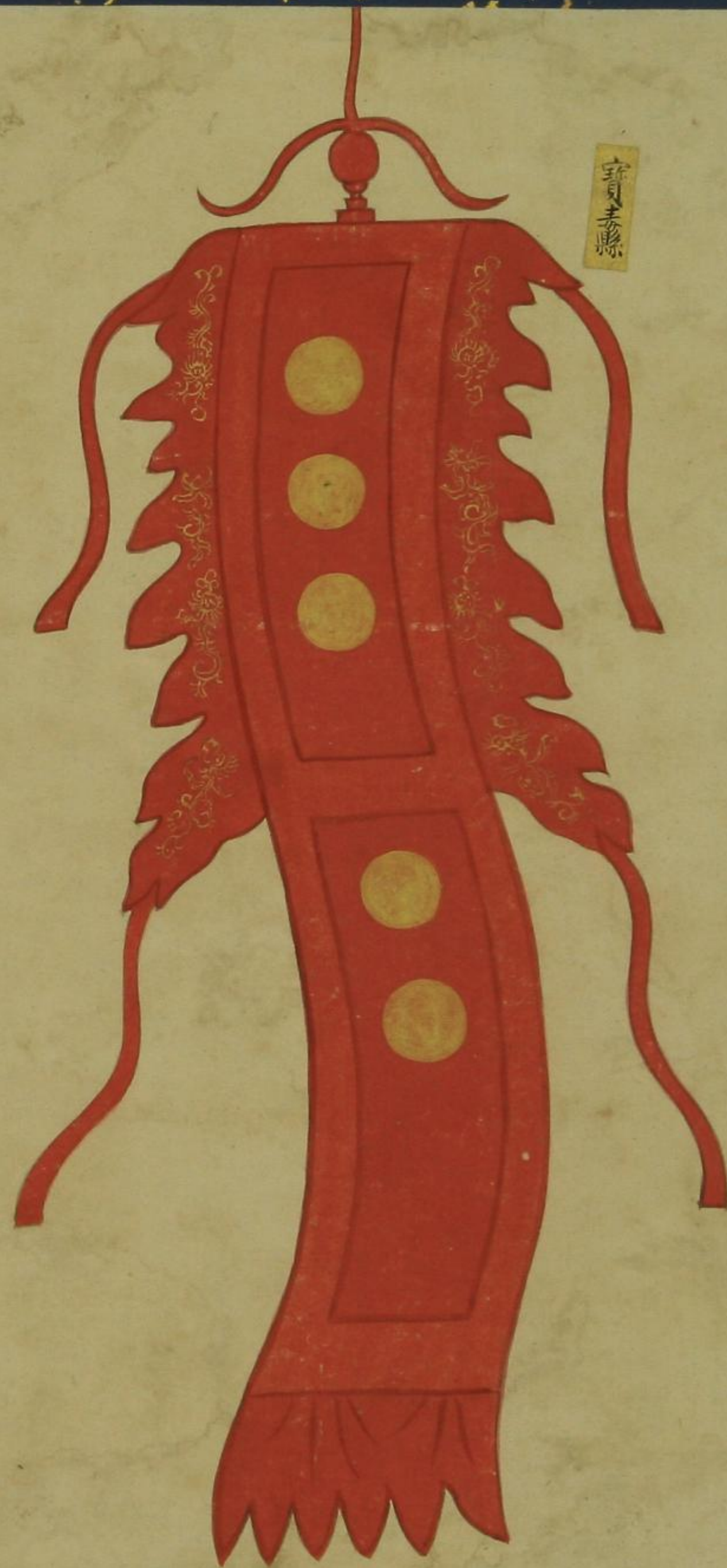


耳環





金瓜



寶壽懸



節



輕帶





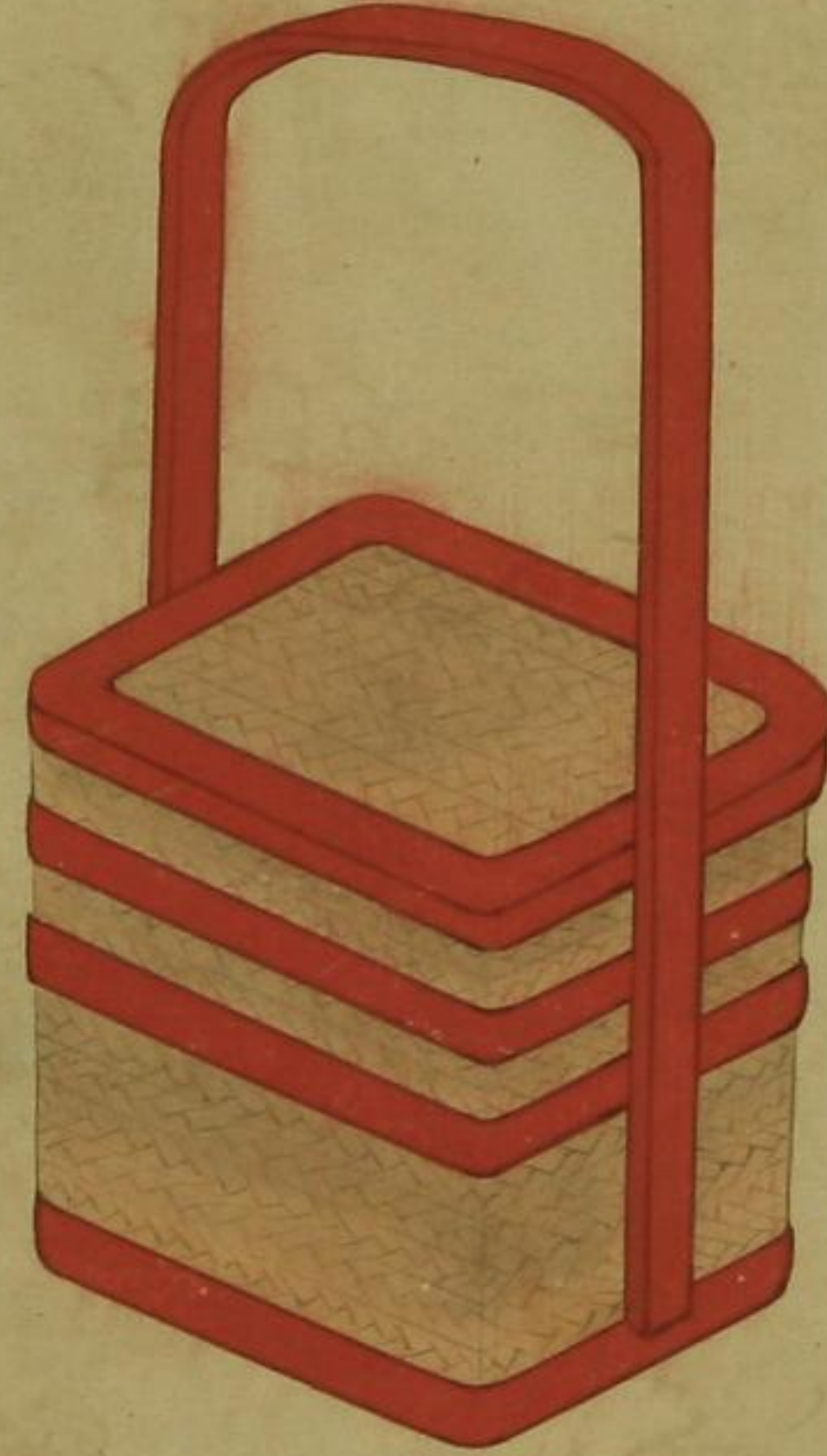
帽子



唐巾



帽



筇



鞋帶



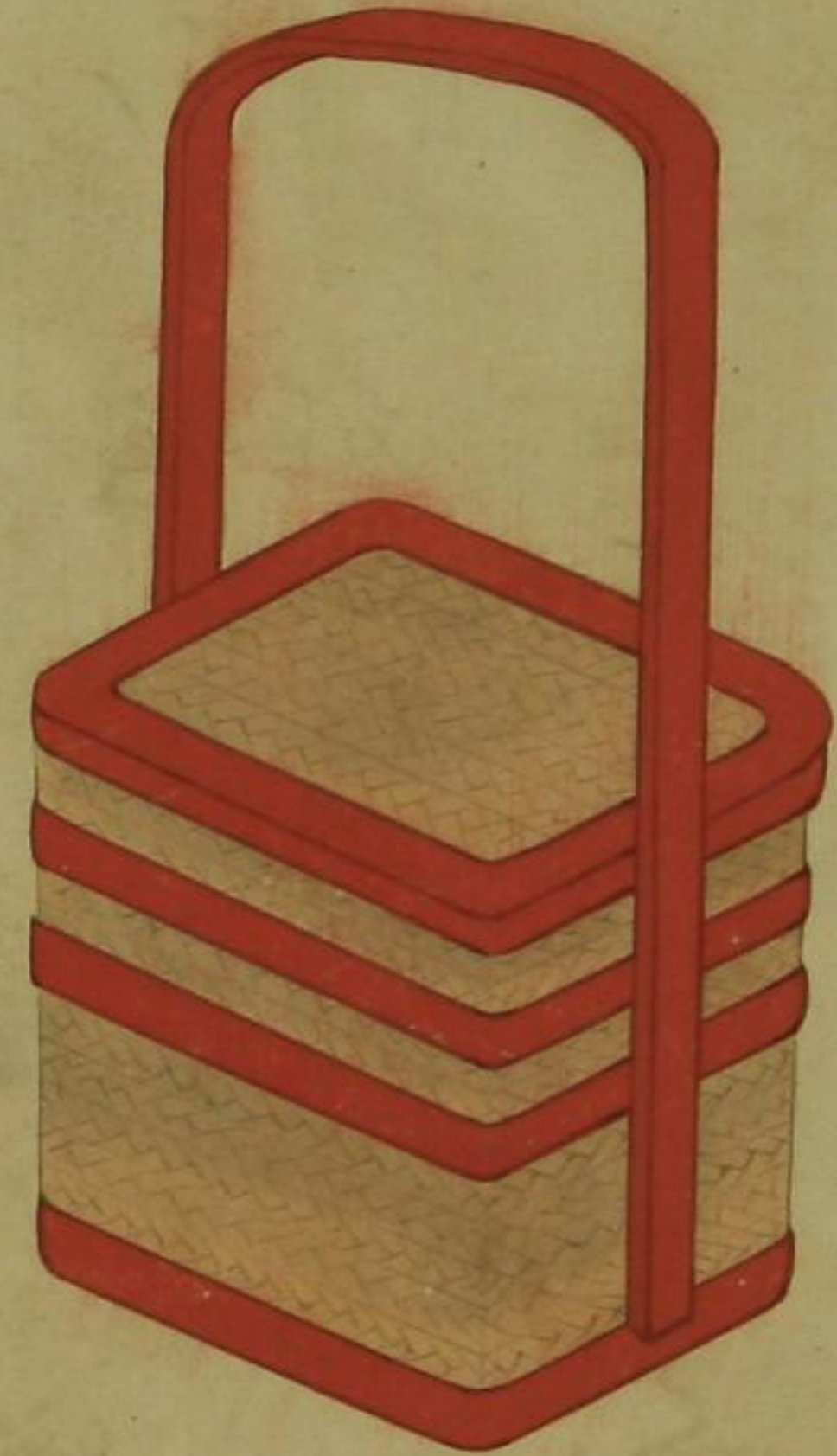
帽子



唐巾



帽



斗笠



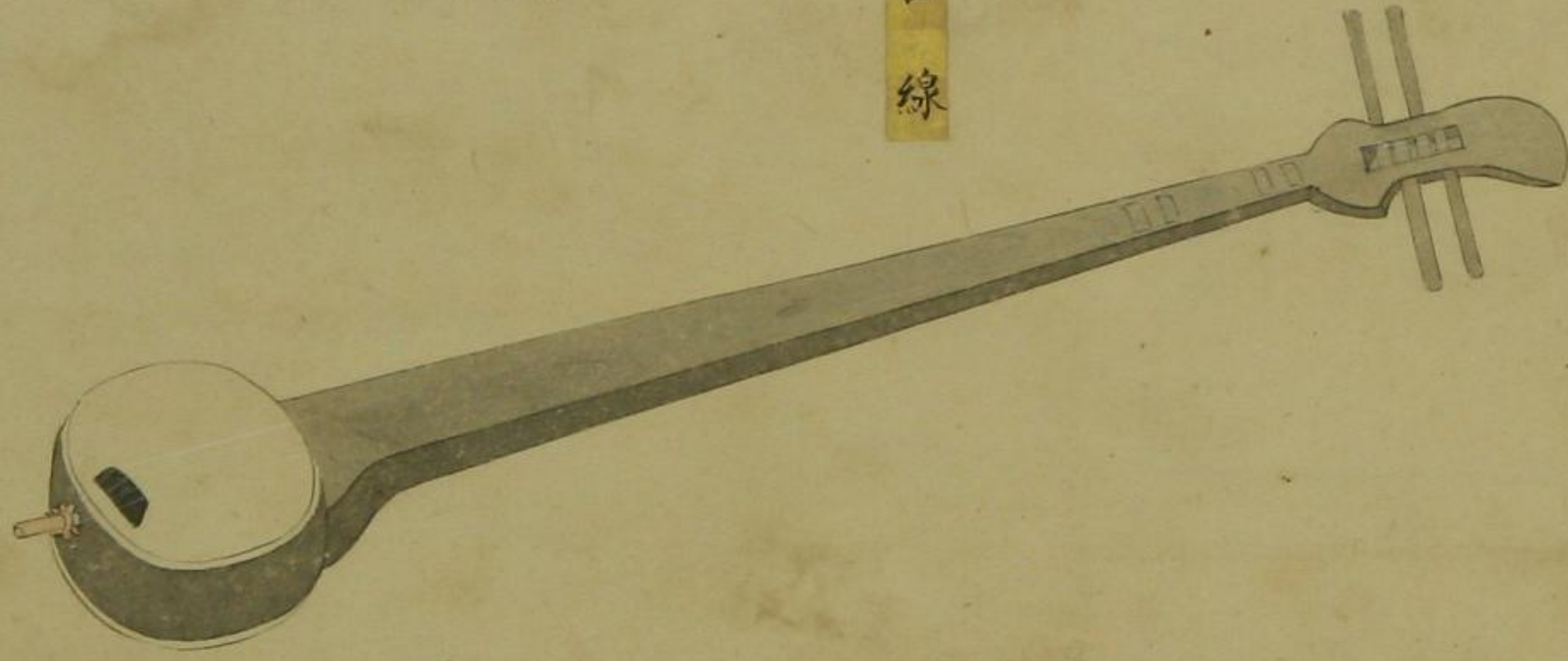
滿帽



毡帽



四線



僧帽



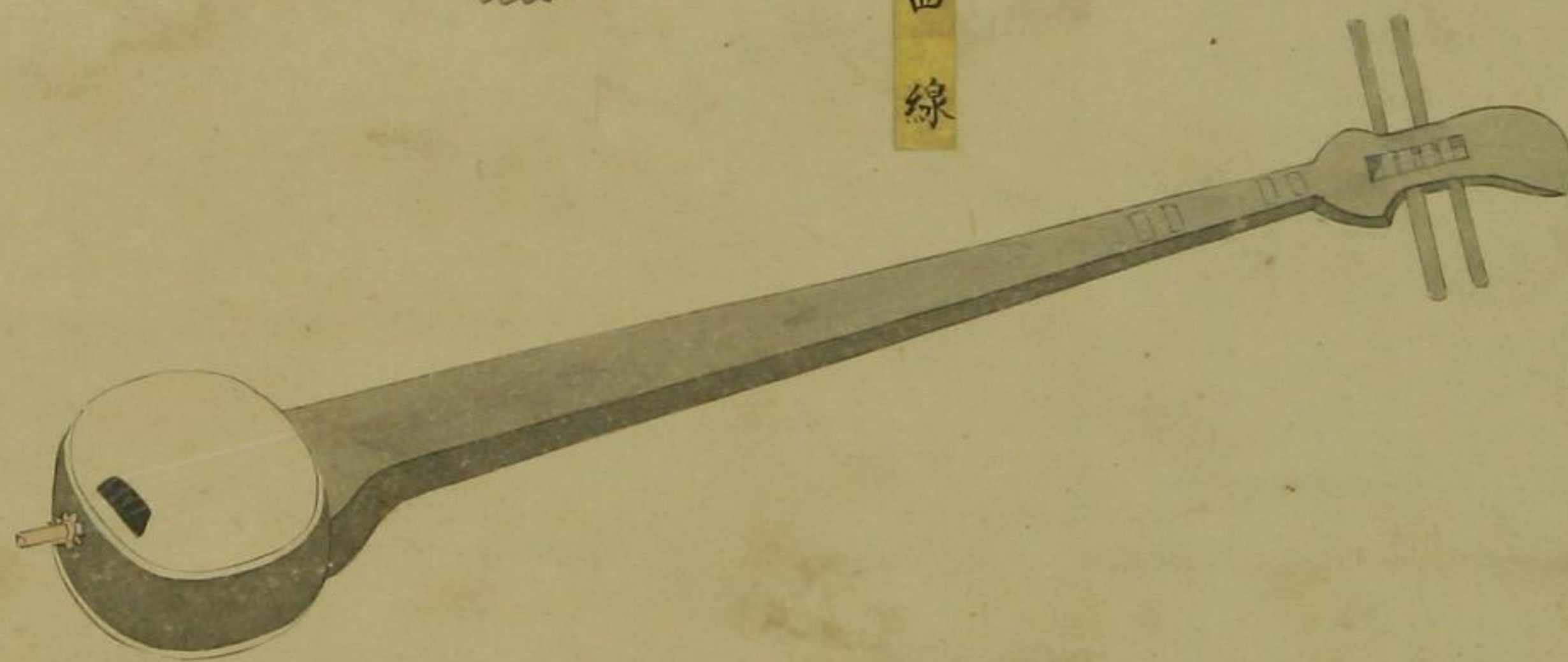
桃  
灯



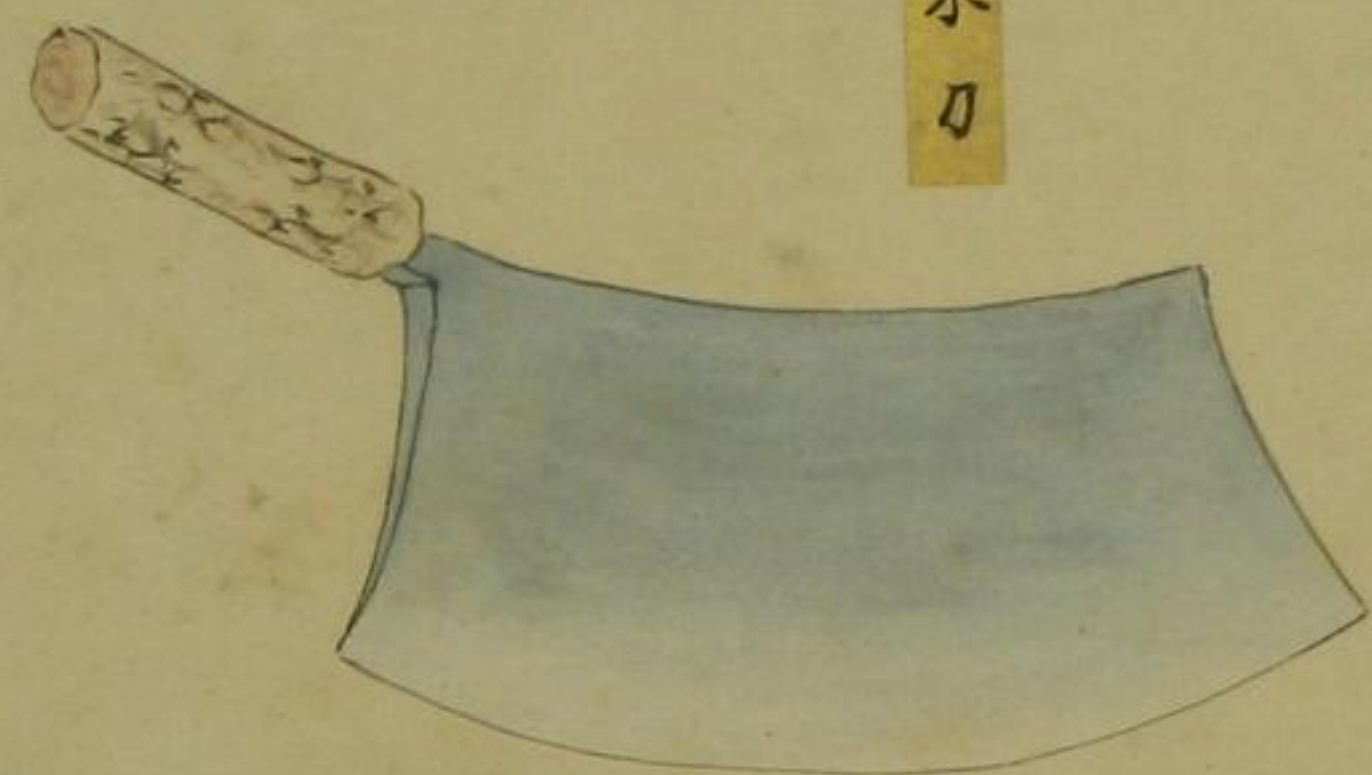
斗  
笠

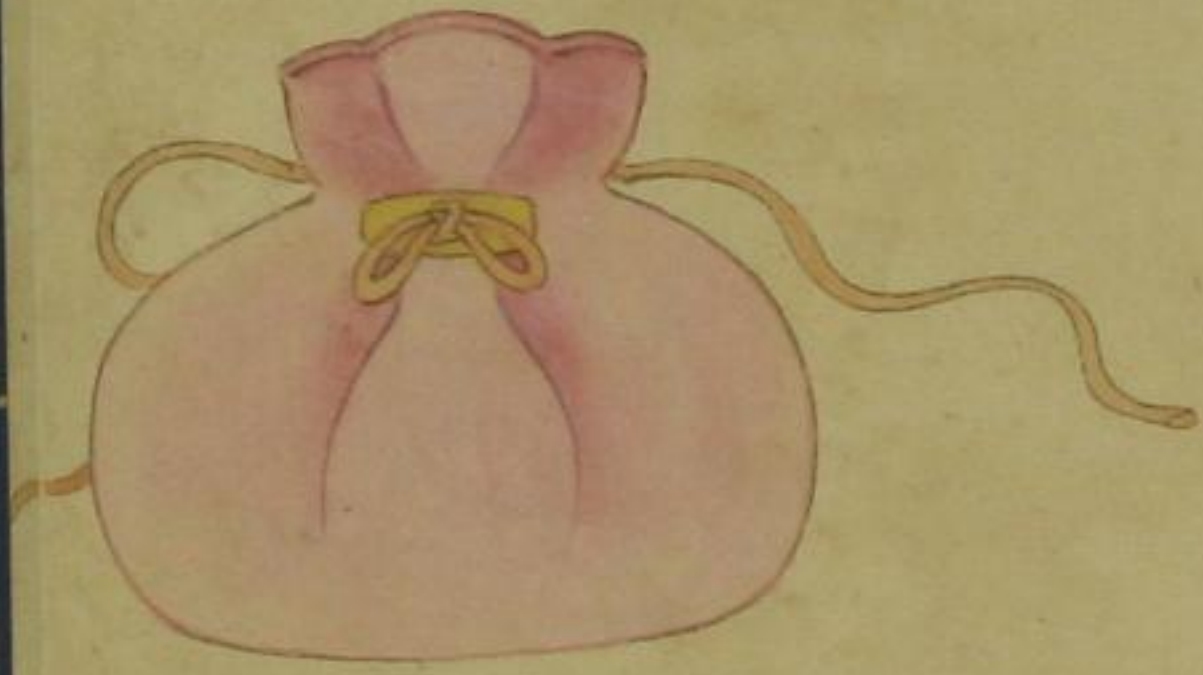


四  
線



菜  
刀





桃  
灯



菜  
刀





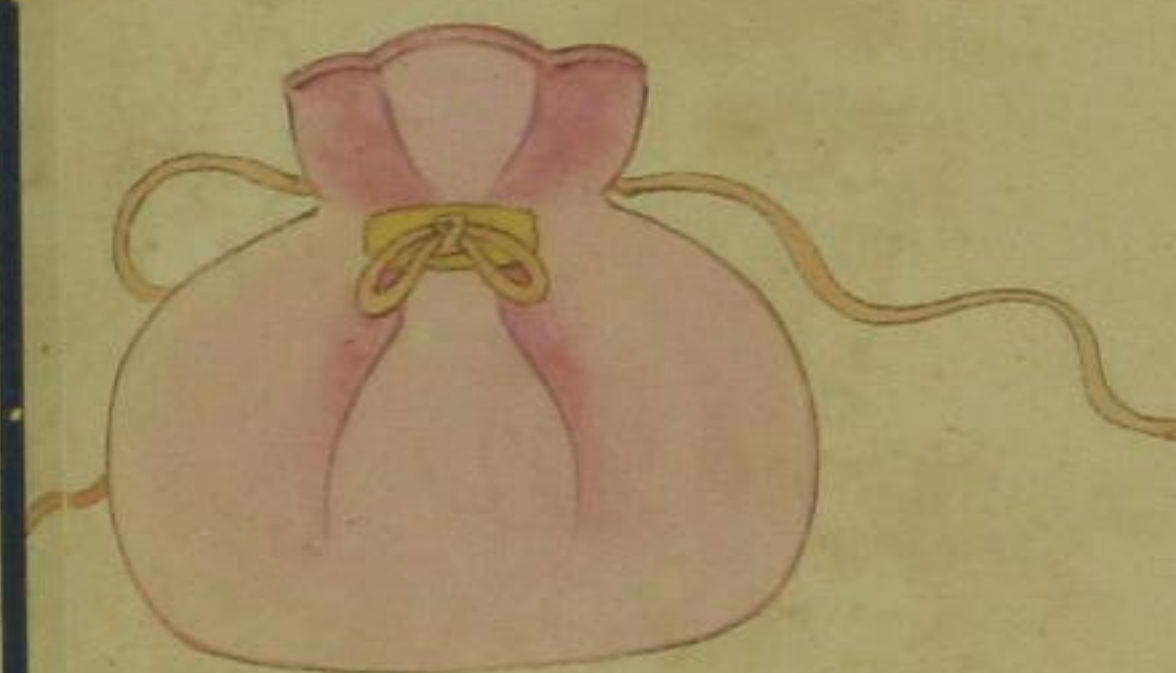
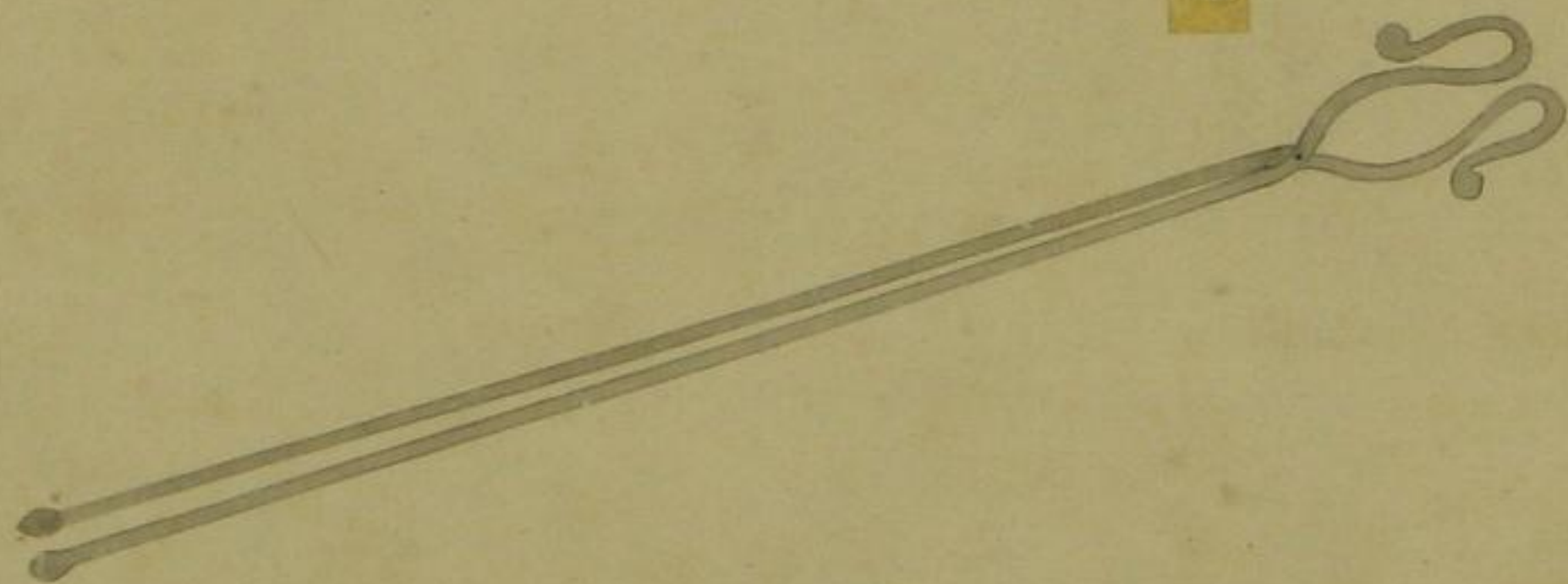
水盂

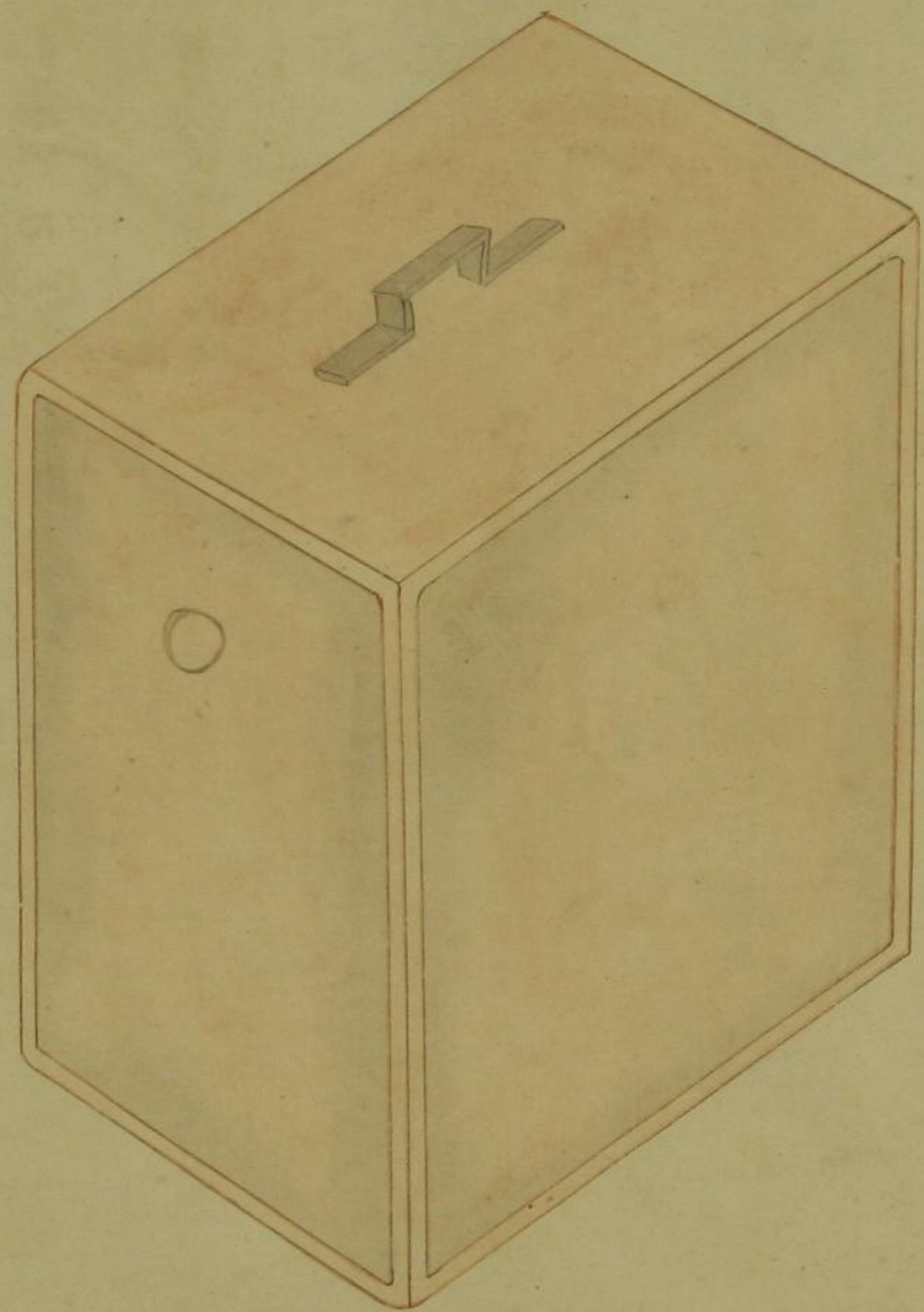


錐



火箸





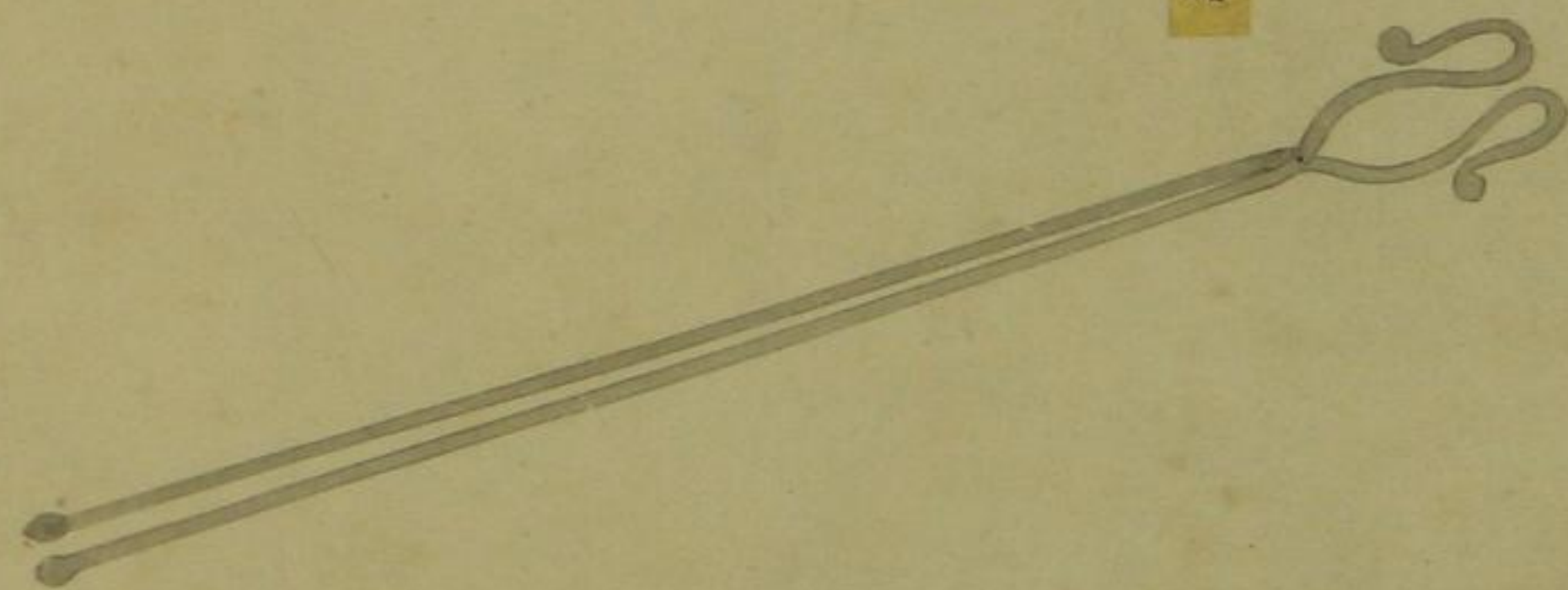
水  
盂



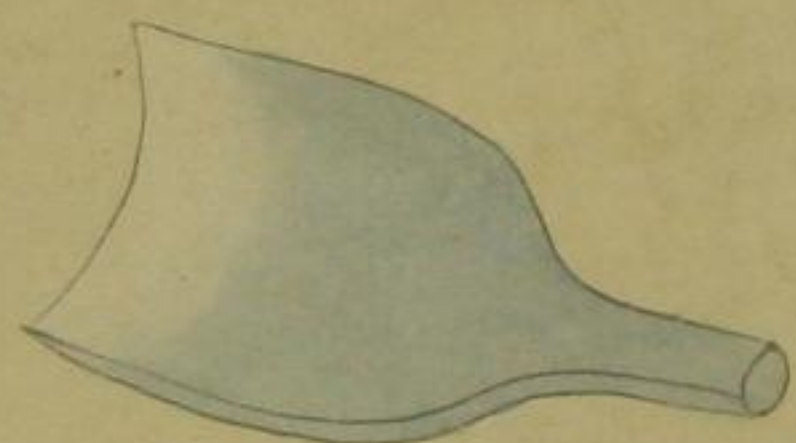
錐



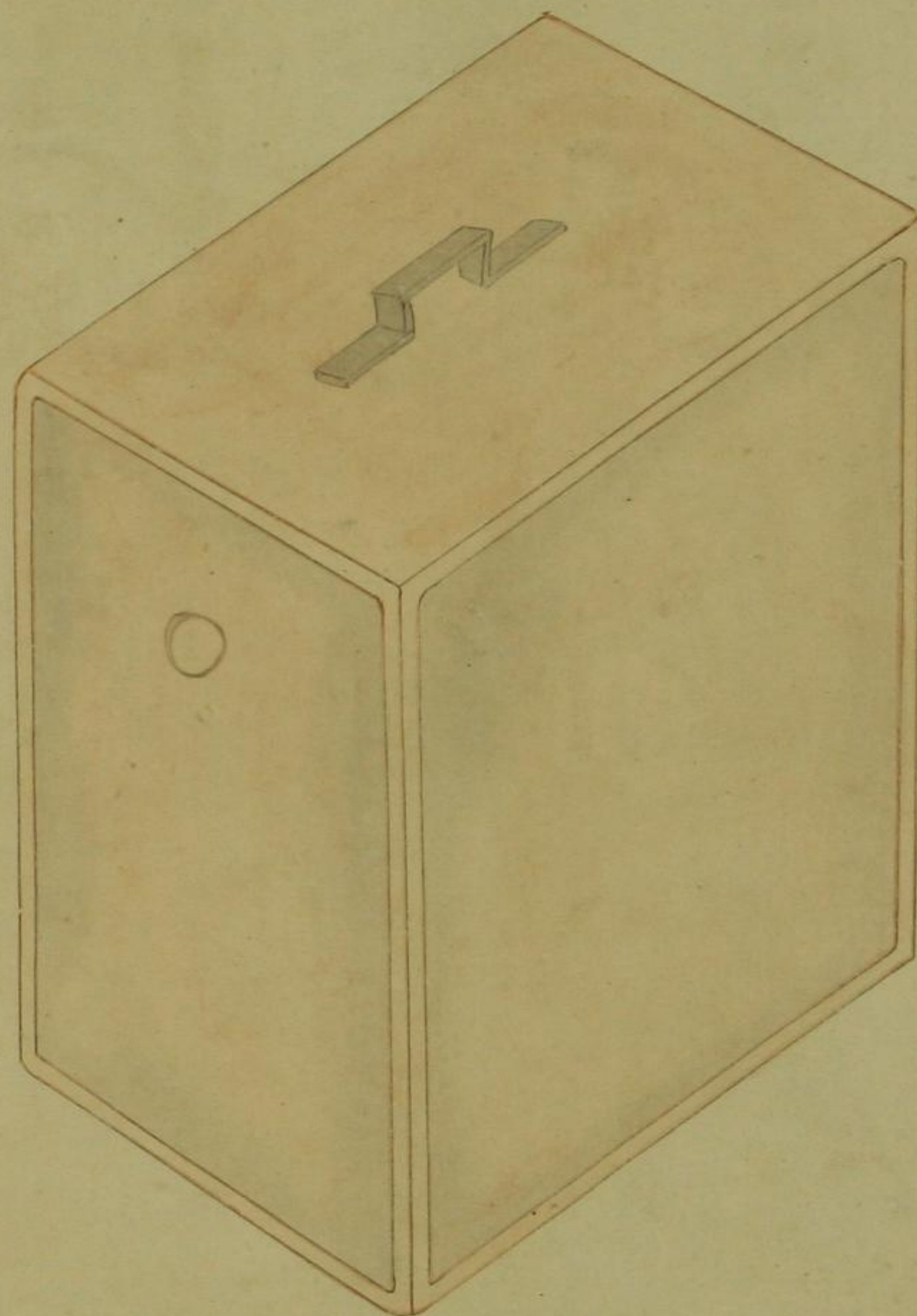
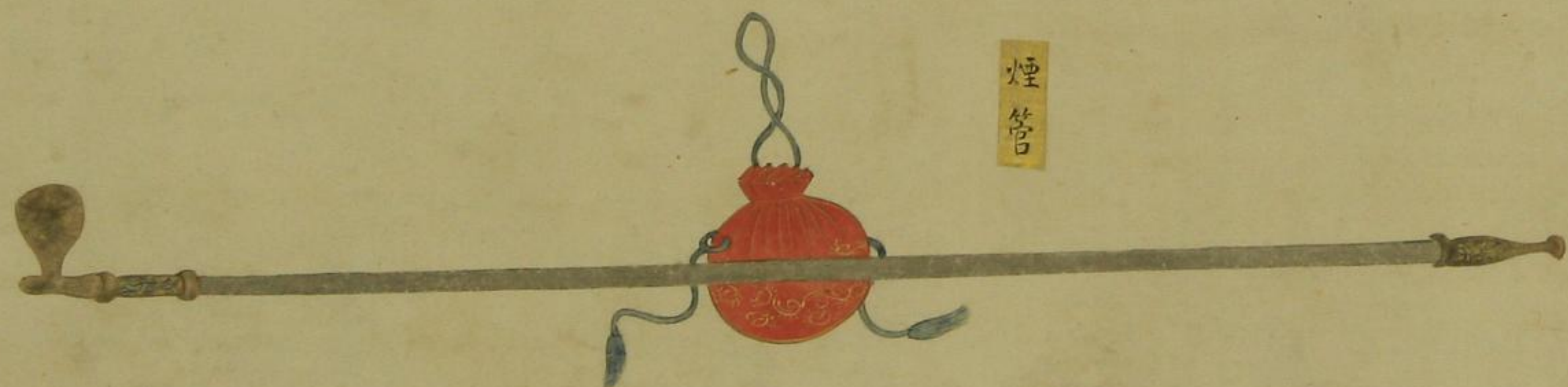
火  
箸



用銀



煙管

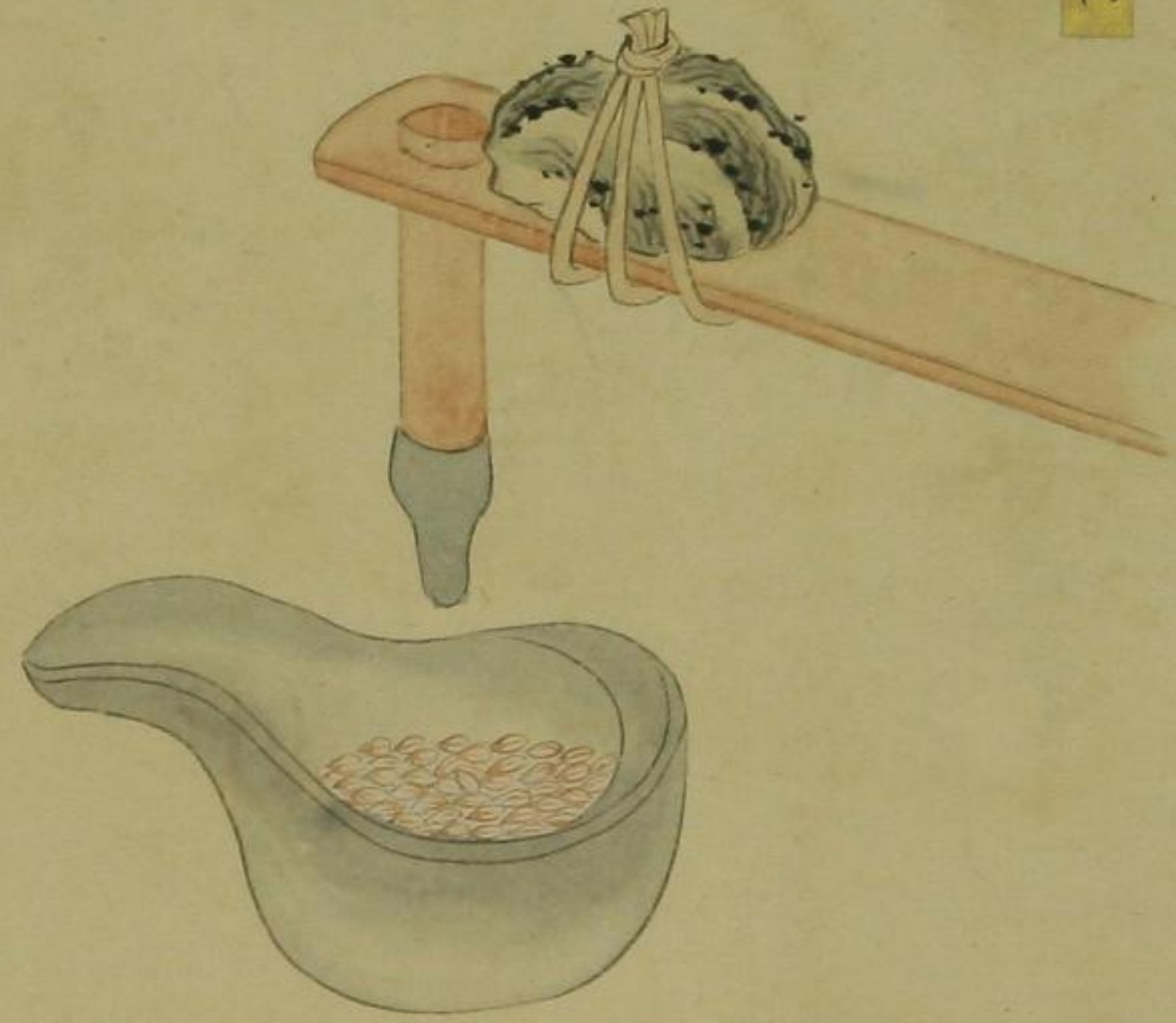




驢馬



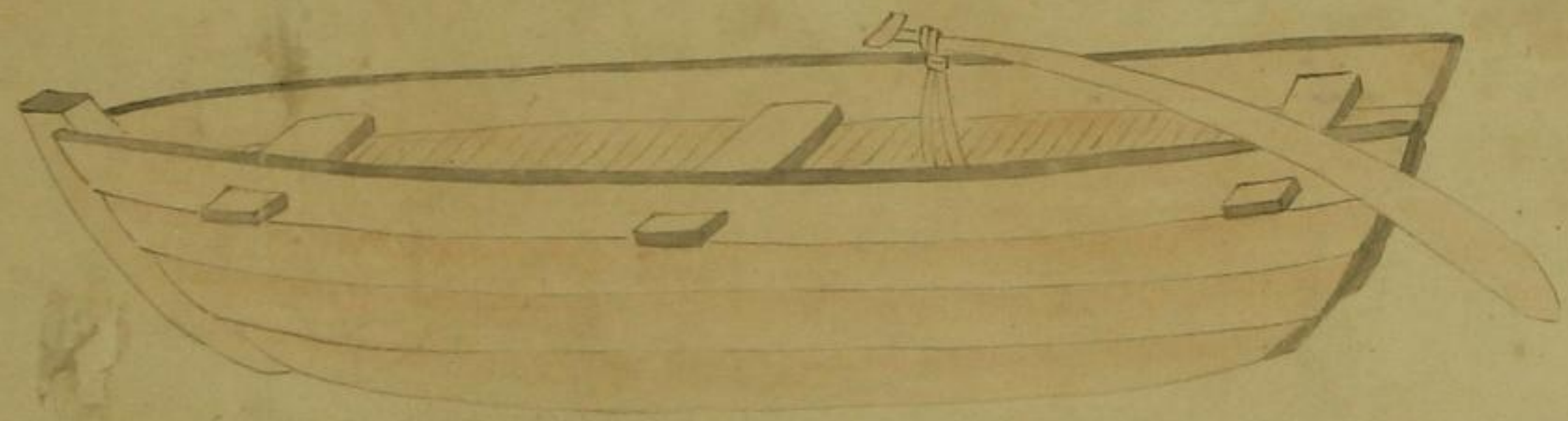
米臼



水牛



朝鮮屬島之人物併船



水牛



朝鮮屬島之人物併船

